（第三種郵便物認可）消費税込み定価１ヶ月3,000円・１部120円　日曜休刊

マイウエイ my way

南山大学学長　ミカエル・カルマノ　11

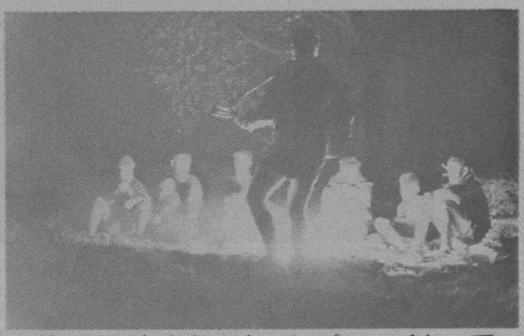
好き・嫌いな科目

日本の教育制度で5年生に当たる学年から始まる、ラテン語とギリシア語を必修科目とするギムナジウムは、もともとこの（9年のカリキュラムを持つ）学校の原型ではあったが、私が通っていた当時すでに、現代外国語や自然科学を教育課程の中心とするコースの中で、少数派になっていた。自分が選んだコースであったので、私は満足していたし、死語を勉強していても〝普通の〟高校生だと思っていた。当然であろうが、あまり好きでない科目もあった。

その一つは図画であった。有名な画家の絵を見てもあまり感激しないどころか、水彩絵等を通して自分自身を表現しようとする興味もなかった。先生の方からみたら、絵を描くことに非常に消極的であった私はきっと取り扱いにくい生徒であった。音楽の先生とも話はあまり合わなかった。バイオリンのレッスンを受けて、音楽が好きな子どもであったが、先生に誘われても、彼が率いていた学校のオーケストラに参加するのを頑固に拒んでいた。

バイオリンの先生の生徒でつくられたアンサンブルや、時々クラスの友達と一緒にやった室内音楽の演奏の方が、学校と関係がなく、自分には合っていたかもしれない。

面白かった古典で詩の翻訳



ボーイスカウトのキャンプファイヤーでギターを弾く（64年）

好きな科目はやはり古典のラテン語・ギリシア語であったが、特にクラスメイトが「難しい」と音を上げていた詩や叙事詩の講読・翻訳に魅力を感じていた。同時に、私はボーイスカウトでも活躍して、夏休みの間に必ず2～3週間のキャンプに行った。夜のキャンプファイヤーでギターを弾いて、仲間と一緒に歌を歌ったりすることは実に楽しかった。自炊の食事の美味しさ、そして2週間の間お風呂・シャワーと関係ない生活の香りも特筆に値する。

ところで、ボーイスカウトのサマーキャンプは私にとって最初の外国旅行のきっかけにもなった。行き先は隣のフランスで、フランスのボーイスカウトと一緒に古い教会の修復を手伝っていた。学校で学んだフランス語を実際に使えるチャンスにもなったが、「国境」というものについても考えさせられた。1950年代からフランス・ドイツ両政府が推進した若い世代の交流政策のおかげで、パスポートなし、身分証明書だけでフランスに入国できたのである。国境は人を阻む障害物ではなく、人を迎え入れる門と見なしたい。